ヘンリー・ソロー

奥 田 穣 一

Henry D. Thoreau

Joichi OKUDA

アメリカルネッサンス期の文人、ソローはいわゆる捉え難い人物とされてきた。エッセイスト、思想家、超絶主義者、隠遁者、革命家、科学者、詩人などと呼ばれ、快楽主義者、禁欲主義者などと呼ばれもした。ソローとは、しばしば正反対に規定されてきた人物だった。ソローの思想は彼の師、エマソンを模倣したものとされ、エマソン自身もそう信じていたのだった。周囲の者たちはソローの顔の表情までがエマソンにそっくりになっていたといった。しかし、ソローの思想の重要度は、今日エマソンをはるかに凌ぐといえるだろう。ソローは今後も変容し、成長し続けるであろう。ソローの批評家がいうように、われわれは群盲が象を撫でるように、彼のあの部分、この部分に関わり続け、彼の全体像に触れるのははるか未来のことではないか。アプローチすればするほど遠ざかるソロー、このソローのテキストを綿密に読むことがわれわれにとっての当面の課題であろう。

捉え難き超絶主義者、しばしば正反対に規定されてきたこのソローとは自らの内部につねに大きな矛盾、葛藤の如きものを抱えていた人物だったと一応いえるだろう。本論ではそれを抱えるソロー自身という視角からソローを窺おう。とくに、ソローに及んだスピノザからの示唆を指摘しながら論じてみたい。

先ずはソローの人生をざっと通観することから始めるなら、ソローのいわゆるウォールデン期（1845～1847）とは彼のインスピレーションが閃き、自然とのソローの一体感が体験され、直感的に彼が自然を眺めることのできた時期であり、彼の第一作『コンコード川とメリマック川の一週間』や主著『ウォールデン–森の生活』はこのウォールデン期での体験–子供時代についての幸せな夢想ともしばしばつながっていた体験–と大きく関わる。後年ソローはあまりにも綿密な自然の観察者となっていた。自然は対象化されて眺められ、ソローはかつての喜びを失っていた。ウォールデン期のソローは喜びこそは人生において最も重要なもの、必須のものであると一応信じていた。ある行為が正当か否かはそれが喜びと共になされていたか否かによるとしていたようである。喜びが行為の判断基準とされていたかに見える。ソローは、いわば喜びのプラグマテイストだった。ウォールデン期以前の『日誌』でも「子供が夏の到来を楽しみに待つ」ような気分で「喜び」と共にいつも生きたいものだ、などと、ソローは願っているのだが（1838 年 1 月 6 日、第 1 巻 25）[1] ソローでの喜びへの言及が著しくなるの

は、やはりウォールデン期に入ってからで、1840年6月23日では「先ず陽気であれ…子供のようにゆかいな気持」（第1巻150）であれ、と述べた。1841年3月15日では“careless happiness”こそが大切と説き、続いて「一切の知恵（wits）」には“cheerfulness”が含まれている、と説いた。（第1巻239）この1841年3月15日での、喜び、幸福、快活が“careless”な状態であり、“wits”の特質であるとするソローの主張が彼の人生のいつ頃まで続いたのかはなかなか決め難い。ただ彼における否定し難い傾向として、ある時は顕著に、ある時は微かに、長くずっと続いた。『日誌』1860年3月1日でソローはこう述べている－“The most valuable thoughts which I entertain are anything but what I thought. Nature abhors a vacuum, and if I can only walk with sufficient carelessness I am sure to be filled.”（第13巻170）エマソンやソロー等、ニューイングランド超絶主義者たちに、汎神論哲学者スピノザからの示唆が及んでいたことについては時折り言及されているのであるが、エマソンについてはさておくとしてなぜか管見ではスピノザとソローとの本格的考察がなされたのを知らない。調べてみるなら、ソローの著作にはかなりの程度においてスピノザからの示唆が及んでおり、この1860年3月1日の『日誌』も“nature abhors a vacuum”なる、スピノザの思想に依拠しながら記されていたのだ。すでに引いたソローの『日誌』1841年3月15日において、喜びが“careless”な状態であり、“wits”の特質であったように、1860年3月1日の『日誌』でも喜びに充ちた“carelessness”の状態が語られていたといえるのではないか。“the most valuable thoughts”はここで“wits”に対応していると考えられるのではないか。“I am sure to be filled”とは詳しくは“I am sure to be filled with joy”のことではなかったか。“散策者”と評されるソローの散策とは彼の心的空虚（vacuum）を汎神論的“nature”（自然）で一杯に満たす、喜びの体験、スピノザのいう“真福”の体験、を鋭意めざすものだったといえるだろう。ソローの世界が汎神論的なものであったことは『コンコード川とメリマック川の一週間』の中でうたわれ、さらに『ウォールデン－森の生活』の中に転載されたソロー自身のこの詩において最も端的に示されていよう。“gods”をソローがこううたう。

> Light - winged Smoke, I carian bird, Melting thy pinions in thy upward flight, …… Go thou my incence upward from this hearth, And ask the gods to pardon this clear flame. [2)]

ソローの『日誌』や諸作品において見るようにスピノザの思想は、ソローのめざした生活哲学、簡素な生活にも示唆を及ぼしていた。生活の中から積極的に所有物を減らし、“Sufficient carelessness”の状態になろうとしていたのであった。喜びで心的“vacuum”を満たそうと努めていたのである。『日誌』1856年12月6日において、ソローが“my wealth is not possession but enjoyment”（第6巻294）と述べたゆえんである。簡素な生活を実践し、心的“vacuum”を喜びで満たそうとするスローは1850年の『日誌』のどこかで述べているように、「知識や文化」をも生活の中から除去しようとしたほどだった。

ソローの『ウォールデン－森の生活』は全18章から成るが、第1章「経済」は最もページ数が多

くこの作品の約 1/3 のページ数を占める。第 1 章とは、この作品の終わりまでには喜びで満たされる心的 “vacuum” を設置する章として読めるのである。第 1 章においてソローは鋭意、不要なものを捨て去って生きる簡素な生活を説いていたのだった。作品の 1/3 が第 1 章であるとは、ソローがいかに心的 “vacuum” の設置を、“sufficient carelessness” を重視していたかを意味するものである。『ウォールデン－森の生活』を事実上しめくくる章、第 17 章「春」ではついに「無心（innocence）」が「回復され」、「喜び（joy）」が訪れていたのだった。(P.335)

ここで、自然観察に際して対象を眺めるソローの視線そのものに注目してみよう。『日誌』1852 年 9 月 13 日において見るように、しばしばソローは対象を “look” せずに “see” したいと願った。（第 4 巻 351）さらに、この 9 月 13 日において見るように、“see” は “sauntering of the eye” などとも呼ばれ “look” と対照されたりもする。“look” の視方では対象が注視され、近視され、視線により占有されてしまう。“see” の視方では対象が受身的に眺められ、眼がリラックスしており、視線が目に隣接するものへと後退し、遠視的になっている。対象の輪郭が際立たず、あいまいになっているのである。“see” の視方は印象的、“look” の見方は科学的と一応いえるだろう。1854 年以降において、すなわちソローが自然に対して綿密な科学者的態度をとり始めた頃から、彼は対象を “look” せず、“see” したいものだと、まことに頻繁に自らに向かって促す。ソローは自分が幸福な、調和的、印象的世界から離れ、ますます自然をくっきり対象化して眺め始めていたことを明らかに強く意識しつつあったのだ。ソローが願う、くつろいだ、受信的な視方 “see” の見方とは、あの喜びの装置、心的 “vacuum” を、すなわち “sufficient carelessness” を彼自身の内部に設置することに他ならなかった、といえよう。『ウォールデン－森の生活』で、不要なものを除去する、簡素な生活を実践したように、ソローは対象を占有する、我執の “look” する見方を離脱したいと、自らに鋭意促していたのであろう。

『ウォールデン－森の生活』でソローにより設置された心的 “vacuum” は作品の構成において「無心」と「喜び」、“innocence” と “joy”、によって満たされたのであった。実際、ソローには喜びと無心は深くつながり殆ど切り離せないものだった。しばしば喜びの喪失は無心の喪失を、無心の喪失は喜びの喪失を意味したのだった。『日誌』1854 年 5 月 28 日においてソローがこういう －“It would be worth the while to ask ourselves weakly, Is our life innocent enough?”（第 6 巻 310）。このようにいうソローとは、無心と喜びを失う自分自身を自覚し嘆く彼自信に他ならなかった。たしかに、ここには、心的 “vacuum” を無心と喜びで満たすことに自信を抱いていたあのソローはいないのだった。なるほどソローは『日誌』1851 年 8 月 12 日で、「自然が今も子供の無心を保存している」といった。（第 2 巻 388）だが、そういったソローとは、自分がもはや自然のようには無心ではない、せめて自然が無心であるように、と願う彼自身なのだと考えられるのである。

ソローには深くピューリタニズムの伝統が生きていた。このピューリタニズムを生きるソローは、彼の血肉と化す東洋思想、汎神論思想、を生きるソローとは、むろん異なる人物だった。伝統的ニュー

イングランドピューリタニズムについて、先ず経済的視点と道徳的視点から一言し、それからピューリタンのソローを窺おう。ピューリタニズムには批評家もいうように経済的繁栄、成功をめざす一面がある。心正しき人間には経済的繁栄が約束されているのだ、とピューリタンは自らにいうのだ。すなわち簡素な生活が志向されているばかりではなかったのである。アメリカが物質的文化をめざす国である以上はピューリタニズムに経済的繁栄を見出し、容認する解釈にブレーキがかかることはないだろう。道徳的な視点から眺めるならば、ピューリタニズムには、むろん良心的な厳しさという面がある。この厳しさゆえにピューリタニズムが精神に不健全な影響を与えたとみなす者もいるのだ。良心的な厳しさに囚われたピューリタンは原罪を意識し続け、つぐないを説いてやまぬであろう。ソローの友人だったホーソンはピューリタニズムにおける良心の厳しさ、頑迷には相当に批判的だった。だが、ピューリタニズムの厳しさを抱き続けた人物だったのであり、禁欲が人間の魂の向上には欠かせない、と信じていたのだった。

ピューリタニズムの二つの側面、経済的側面と道徳的側面がピューリタンであったソローとどのように関わるのかについて考えてみるならば、むろんソローは物質的成功、繁栄をよろこぶピューリタンではなかったといえる。むしろ、否定的に経済的側面と関わるピューリタンだった。マックス・ラーナーがどこかで適切に指摘しているように、ソローが工場制度をきっぱりと拒絶したゆえんは、それが他人を搾取するものだったからであり、さらに、ソローがピューリタニズムの物質的成功の教義を拒絶したゆえんは、それが自分自身を搾取するものだったからだった。『ウォールデン－森の生活』で簡素を実践し、“sufficient carelessness”の状態をつくり出したソローとはピューリタンのソローでもあった、といえるだろう。生活の簡素を説くピューリタンのソローは汎神論的な彼自身と心的“vacuum”を設置するために互いに協力関係にあったとみなし得るのだ。それでは道徳的観点から眺めた場合の、ピューリタンのソローについてはどのようにいえるであろう。ソローはピューリタニズムの道徳的側面と深く関わっていた。彼は「原理なき生活」ではこういう。ここでは簡素な生活というピューリタニズムの側面とピューリタニズムの道徳的側面が結びついたといえる－「慣例に従うことは、結局、汚れた行為（impurities）と同様に悪いことだ。アメリカは政治的暴君から解放されたのであるが、いぜんとして経済的、道徳的暴君の奴隷である」。[3)]「慣例に従うことは、結局、汚れた行為（impurities）」であると嘆くソローには、まことに端的にpureなピューリタンが、purityの実現をめざすソロー自身が、暗示されているのだ。

『ウォールデン–森の生活』の第11章「高い原理」は汎神論的なこの作品を通じピューリタン的な色彩が最も濃厚な章である。この章で、たとえばソローがこういうのである。

> 「知恵と純潔は努力からうまれ、無知と色欲は怠惰からうまれる。不純な人間は大体において怠惰でストーブの傍らに座り込みそのねころんだ姿を太陽に照らされ、疲労しないのに休息したりする。……不浄と罪をさけようとするならたとえ馬小屋の掃除であろうと一所懸命に働く

ことだ」(239)

「あらゆる純潔はひとつだ。食べることも、飲むことも、同棲することも、眠ることも、色欲的であれば、どれも同じことになる」(239)

「人を堕落させるものは口に入る食べ物ではなく、それを食うときの食欲なのだ」(237)

「われわれの生活全体が驚くほど道徳的である。徳と罪悪との間には一瞬間の休戦もない……。われわれは各自の内部に動物性の存在していることを意識している。それはわれわれの高尚な本能が眠るにしたがって目覚めるのだ。それは爬虫類的で肉感的なもので、たぶん完全には追い払うことができないだろう……。自分の中で動物性が消滅し、聖なるものが確立してゆくと確信できる人は幸せだ」(237 – 38)

ソローはホイットマンの作品を賞賛したけれども、しかし作品の肉感的なところが不愉快であると評していたのだった。周知の通り、ソローは、ホイットマンが愛をたたえない、あれはまるで獣がしゃべっているみたいだ、とホイットマンを貶めたのだった。ピューリタンの信条である purity とは一般的に、不浄なものとミックスしない状態、汚染されない状態を表してもいた。とするならば、『ウォールデン–森の生活』の第 5 章「孤独」においても、かなり鮮明なピューリタンのソロー像が浮かび上がっていたといえる。ソローがこういう–「太陽はひとりである。くもった日には二つに見えることもあるのであるが、一方はにせものである。神はひとりだ–しかし悪魔の方はひとりどころではなく、ものすごく大勢の仲間がいてまさに無数だ」。(153 – 54) ソローが鋭意めざした孤独生活とは不浄なものとミックスしない状態、汚染されない状態と通じるものでもあったのだろう。

また繰り返すならば、『ウォールデン – 森の生活』とは構成上、第 1 章「経済」において設置された心的 “vacuum” が第 17 章「春」において喜び (joy) あるいは無心 (innocence) で満たされ結ばれる汎神論的作品であった。それだから、ピューリタンとしてソローが実現をめざす purity と innocence とは作品において二つのキーワードといえるものだったのだ。とするなら『ウォールデン – 森の生活』は葛藤を、少なくともしこりのようなものを、暗示してしめくくられていたのだ。というのも、「自分のなかで日々動物性が消滅し聖なるものが確立して」いるか否かの点検を怠らないピューリタンのソローが、「怠惰」によりうみだされる「爬虫類的で肉感的なもの」、このものを「たぶん完全には追い払うことなどできないであろう」と認めていたピューリタンのこのソローが、どうして無心と喜びを、無心な喜びを、心的 “vacuum” の内部に見出すことができただろう。

キリスト教の正統派的慣例の一つとして、いわゆる人間の原罪が基本的に仮定されている。「爬虫類的で肉感的なもの」を「たぶん完全には追い払うことができないだろう」というソローにも、彼がこの原罪を深く意識していたことが暗示されていよう。ソローと、彼の友人ホーソンは深く原罪意識に囚われていた点で、いずれ劣らぬニューイングランドピューリタンだったと考えられるのである。ホーソンの短編作品『あざ』では科学者の夫、エイルマーは、他には非のうちどころのない妻、ジョー

ジアナの美しさの傷になっている、彼女の頬のあざをしだいに消し去ることに成功したのだった。だが、消し去った時、彼の妻は死んでいた。ホーソンは人間が原罪を受け入れる必要があるといいたかったのだ。ソローもその必要を少なくともエマソン以上に感じていただろう。しかし、ホーソンほどではなかったように思われる。ホーソンほどにその必要を意識するには、ソローはあまりにもロマン主義者であった。すなわち、アメリカルネッサンス期を代表するエマソンとソローは先ずロマンティストだったといえるのだ。そして、批評家がいうように一般にロマン主義者とは原罪の教義を否定する者の謂であった。スピノザに由来する心的 "vacuum" を無心と喜びで満たそうとしたソローはロマン主義のサイドに立つニューイングランド超絶主義者だったのだ。

環境危機時代を生きる今日のわれわれにとり、ソローがとりわけ重要な意味をもつゆえんは、彼が哲学史的に、やはりスピノザと深くつながっていたからである、といえるだろう。ざっと哲学史を説明し現代のわれわれについて考え、そのことを論じたい。[4] それは、あの心的 "vacuum" を満たす無心の意味を明らかにすると思われるのだから。17 世紀こそは合理(理性)主義が主流となる時代であり、デカルトは数学という理性を用いて『哲学体系』をまとめ上げた。スピノザもまたデカルトと同様に理性主義の伝統に立っていたが、二元論者であったデカルトと相違し、スピノザは一元論者であり、存在するものはすべて自然であるのみならず、神とは自然であると説いた。すなわれスピノザは汎神論者であった。18 世紀になるや、17 世紀の主流だった合理 (理性) 主義の批判が英国哲学者たちによって始まった。ロックは人間が感覚経験することなしに意識の内容をもつことなどできないと、人間の思考内容と観念は人間がかつて感覚経験したことのあるものの反映であると、述べた。エマソンやソロー等、ニューイングランド・トランセンデンタリストたち (transcendentalists) と深く関わる、ドイツのトランセンデンタリスト大哲カントは知識が感覚を通してやってくるとした点で感覚経験主義哲学者に似ていたのだが、感覚経験のとらえ方を決める前提条件が理性によるとした点では彼は合理 (理性) 主義哲学者に似ていた。カントは感覚にも理性にもそれぞれ一役買わせ、いわば役割分担を定めて感覚と理性の問題を解決したのだ。18 世紀の終わりから、19 世紀の中頃まで続いたロマン主義の時代は理性を重んじた啓蒙時代への反動としてドイツに興り、感覚・感情・想像・体験を貴んだ。さらにこの時代は人間の自我を無制限にあがめた。なぜならカントが人間の理性 (直感的理性) の、認識に果たす役割を強調していたからだった。すると、ロマン主義の時代の人々は自然とは一つの大きな自我であると主張し始めたのみならず、自然の中で神に等しい自分自身を体験するようにさえなっていた。そして自らルーツをスピノザの汎神論哲学に見出していた。すなわち、ここで 17 世紀のスピノザが再発見されていたのだった。

人間であれ、山であれ、多様な一切に自己実現の権利を容認し、それぞれお互いの間に汎神論的な同一性を見出すこと、人間中心主義をやめること、そのようなことこそ、世界的規模の環境破壊、地球危機の時代を生きる今日のわれわれの義務であると説いたアルネ・ネスは、スピノザの汎神論哲学

からインスピレーションを得たすぐれたエコロジストだった。われわれの時代もまたスピノザ哲学と深く関わっていたのだ。アルネ・ネスの思想は人間中心主義的な、人間のための自然保護をめざす“浅いエコロジー”に対して“深いエコロジー”と呼ばれる。深いエコロジーの作家を日本にさがすならば、たとえば『注文の多い料理店』、『なめとこ山の熊』などを書いた宮沢賢治を見落とせまい。深いエコロジーの作家をアメリカにさがすならば、われらのソローを見落とせないのだ。ソローやエマソン等にはスピノザからの示唆が及んでいるのであるが。エマソンとは異なり、人間非中心主義的だったソロー、自然中心主義的だったソロー、この人物こそは深いエコロジストと呼ばれるに値するのである。スピノザに由来する、ソローでの心的“vacuum”を満たす無心とは、深いエコロジー体験、自然中心主義的体験、に通じるはずのものだったのだ。人間をも自然の一部とみなす自然中心主義的深いエコロジー、この現代における重要なエコロジーの背景にはむろん、スピノザ哲学のみならず、種々の思想が考えられるのだが、先ずはスピノザ哲学こそは強調されるべきものだったのだ。

注）

1） Bradford Torrey, ed. *The Writings of Henry David Thoreau*. Cambridge: Riverside Press, 1968.

2） Henry David Thoreau, *Walden*. New York: W.W.Norton, 1951. 本論での Walden の日本語訳は真崎義博訳『森の生活』に拠ったが多少の変更を加えたところがある。

3） Wendel Glick, ed. *Reform Papers*. New Jersey: Princeton University Press, 1973.

4） 本論での哲学史の説明には『大東文化大学紀要』第 42 号（平成 16 年 3 月発行）での拙論「環境哲学–プロティノス」で用いた言葉を繰返させていただいた。

（2006 年 8 月 18 日受理）